



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2016.4 第63号



提◆言

生物多様性と養豚

日本SPF豚協会
SPF豚農場認定委員会委員

林 哲

生物多様性については、「生物多様性条約」に世界のほとんどの国が締結している。国内的には平成20年に「生物多様性基本法」が施行され、生物の生態系、種、遺伝的多様性の保全の重要性が謳われ、これに関連する施策、活動が各方面で行われている。

我々が一般に「豚」といえば、ランドレース、大ヨークシャー、デュロックなどを思い浮かべ、その他の豚は思い描くことができない。しかし、筆者が畜産業界に入ったばかりの頃には、中ヨークシャーという鼻のしゃくれた品種がいたことを思い出すが、いつのまにかその姿を見なくなってしまった。代わって現れたのがランドレースであり、黒い体に肩から前足にかけて白帯のあるハンブシャーであった。そして、現在では世界のどこに行ってもランドレース、大ヨークシャー、デュロック3品種か、これらから作出されたハイブリッドになってしまっている。あの中ヨークシャーはどこに行ってしまったのだろう。

畜産における豚は肉生産が目的のため、生産性や経済性に難点のある品種はたちまち退場処分を受けることになる。豚に限らず牛や鶏、植物の農産物でも経済性の高い品種やこれらから作出されたハイブリッドが大多数を占め、少品種、大量生産の生産形態が、特に先進国の農業を席卷してきた。このような生産形態は“現状環境（社会的・経済的環境を含めて）”で最大限の経済性を示すものであり、大きな気候変動や病害にさらされると、たちまち全滅する危険を孕んでいる。

元来、生物は種々の環境に対応するように進化し、さまざまな形質の種に分化してきた。これらの原種の持つ種々の形質・特性を組み合わせることで農業生産に適する品種に育種が行われてきた。従って、現在使われている品種の原点は、生物多様性があったからこそ成り立つものであったが、大量生産段階に入ると特定品種に偏る、生物多様性とは真逆の方向に向かってしまう。植物の種は種子として遺伝子保存が比較的容易に可能であるが、動物では生体での維持が容易ではなく、た

ちまち絶滅危惧種になってしまう。

筆者は、縁あって昨年より「ベトナム在来ブタ資源の遺伝子バンクの設立と多様性維持が可能な持続的生産システムの構築プロジェクト」に参画する機会を得ている。ベトナムではかつて50品種を数えるほどの在来豚がいたが、現在では20数品種に減少し、放置すればほとんどが消滅する。都市部では欧米品種がほとんどで近郊部の在来品種は欧米品種との交雑が進んでいる。

それはなぜか？都市近郊の金銭的に豊かで流通も容易な環境では欧米品種を取り入れた方が儲かるからに他ならない。一方、都市近郊から隔離された山岳地帯では、現在も在来豚が少数民族によって保持されている。この地域に行くと豚のみならず、鶏、山羊、アヒル、牛、水牛など全て放牧で飼育されている。動物自らが餌を捜し歩き、命を繋ぐ飼育形態で、人から与えられるのは人の残飯、キャッサバで作る焼酎の粕などのみである。

この飼育形態で動物は繁殖し、ヒナや子畜も生産されている。そして、来客や冠婚葬祭時にと殺し、振舞われる。在来豚は大きくても100kg以下で、冷蔵庫も、と場へ運ぶトラックもないので、小さな体が自家用と殺で消費するにはちょうどよい。このような生産・消費形態に適する品種が選抜淘汰されてきたともいえるのであろう。

少数民族の彼らは住居の周辺にある野山の産物をうまく利用する術を備えており、現金収入は少なくとも心豊かに生活している。これを支えているのは生物多様性に他ならない。

発展途上国は、先進国の農薬・化学肥料を多量に使い少品種を大量に生産する、儲かる農業を追いかけ“経済発展”を目指している。だが、果たしてそれでいいのだろうか？

今こそ、我々の方が、究極のエコロジーともいえるベトナム山岳地帯少数民族のような生活から、多くを学ぶ時が来ているように思えてならない。

SPF種豚と認定農場の分布

(2016年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養母豚数	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	母豚総頭数
99以下	2	0	5	0	0	1	0	8	552
100~299	4	7	24	5	0	1	6	47	9,335
300~599	6	2	6	2	1	8	8	33	13,443
600~999	2	12	4	2	0	2	10	32	25,987
1,000以上	0	10	3	0	0	2	8	23	31,101
計	14	31	42	9	1	14	32	143	80,418
育成・肥育専門農場	0	4	10	5	0	2	14	35	
合計	14	35	52	14	1	16	46	178	
母豚総頭数	4,903	25,975	14,546	3,421	0	7,630	23,943	80,418	

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

地域	2011年度		2012年度		2013年度		2014年度		2015年度	
	農場数	飼養母豚数								
北海道	15	4,406	15	4,929	15	5,016	15	5,096	14	4,903
東北	34	26,310	34	26,875	32	25,446	33	26,438	31	25,975
関東	47	14,885	48	15,618	46	14,824	45	14,598	42	14,546
北信越	10	3,693	10	3,654	10	3,544	9	3,441	9	3,421
東海近畿	3	758	3	168	1	0	1	0	1	0
中四国	15	6,687	15	6,629	15	6,607	15	7,457	14	7,630
九州	30	22,322	31	22,998	31	23,283	31	23,106	32	23,943
育成・肥育専門農場	33		33		33		33		35	
全国	187	79,061	189	80,871	183	78,720	182	80,136	178	80,418

やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は178（G P・G P農場18、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）で、前年度に比べ微減したが、飼養母豚数は増加した。これは、中小規模農場の退会と小既存農場の増頭傾向による。農場形態の大きな変化はみられない。地域別では中国地区と九州地区の一部に増頭がみられる。全国の飼養母豚数88.5万頭（畜産統計、2014年2月現在）に占める認定農場SPF豚の割合は9.1%と横ばいであった。

CM認定農場の生産成績

(2015年度)

表1 一貫生産農場

	件数	母豚数	生産指数	農場回転率		農場飼料要求率		出荷頭数/母豚		A薬品費/肉豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
	109	平均									
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	28	603	124.86	1.97	17.34	3.04	26.20	23.82	44.63	47	36.69
B	27	444	112.02	1.73	15.28	3.20	24.94	21.99	41.19	134	30.60
C	27	569	101.37	1.78	15.74	3.31	24.04	21.25	39.81	260	21.79
D	27	386	88.81	1.60	14.08	3.37	23.62	19.44	36.43	362	14.68
最高成績			147.52	2.46	21.70	2.63	29.40	30.65	57.43	1	39.96
最低成績			73.36	1.18	10.37	3.75	20.63	15.37	28.79	434	9.64
平均値		501	106.93	1.77	15.63	3.23	24.71	21.64	40.55	200	26.04

表2 繁殖専門農場Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	件数 10	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,133	122.07	2.47	21.47	25.08	22.27	23.82	44.45	49	33.89
B	3	1,307	109.94	2.35	20.45	22.55	20.01	21.94	40.94	92	28.53
C	2	912	97.26	2.36	20.49	24.69	21.91	23.37	43.62	230	11.24
D	2	893	93.52	2.35	20.47	23.88	21.20	22.89	42.72	247	9.13
最高成績			127.64	2.51	21.85	25.98	23.02	24.88	46.44	21	37.35
最低成績			93.10	2.29	19.91	21.10	18.73	20.19	37.68	248	9.03
平均値		1,093	107.76	2.39	20.77	24.00	21.31	22.98	42.89	138	22.80

表3 繁殖専門農場Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

	件数 5	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	22.53	40.00	90	20.00
平均値		895	125.86	2.53	21.99	27.29	24.22	27.30	48.46	40	31.19

表4 子豚育成農場（繁殖農場Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

	件数 2	出荷頭数 平均	生産指数	1日平均増体重(g)		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	445.00	40.00	95.00	40.00	70	20.00
平均値		52,754	130.72	539.76	48.52	98.68	58.89	58	23.32

表5 肥育専門農場Ⅱ（繁殖農場Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

	件数 17	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	5	8,678	123.14	3.08	58.72	98.80	37.99	85	26.43
B	4	12,973	110.04	3.28	55.42	97.76	27.58	82	26.95
C	4	18,885	102.61	3.48	52.04	98.26	32.62	139	17.95
D	4	8,404	90.88	3.62	49.62	97.67	26.70	160	14.56
最高成績			139.04	2.86	62.40	99.35	43.48	0	40.00
最低成績			82.14	4.22	39.65	95.86	8.54	198	8.57
平均値		12,026	107.63	3.35	54.23	98.16	31.62	115	21.76

表6 肥育専門農場Ⅰ（繁殖農場Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

	件数 1	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.25	55.00	95.00	25.00	196	20.00
平均値		11,815	125.31	2.79	62.75	94.71	23.57	10	39.57

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場

繁殖専門農場Ⅱ

肥育専門農場Ⅱ

薬品費／肉豚	農場数	平均金額	薬品費／子豚	農場数	平均金額	薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	32	39	100円未満	5	56	100円未満	6	44
100円～199円	27	141	100円～199円	1	144	100円～200円	11	153
200円～299円	15	242	200円～280円	4	238			115
300円～399円	26	358			138	最 高		0
400円～450円	9	418	最 高		21	最 低		198
		200	最 低		248	上位25%の平均	5	85
最 高		1	上位25%の平均	3	49			
最 低		434						
上位25%の平均	28	47						

ロタウイルス感染症

ロタウイルスは哺乳豚下痢便より最も頻繁に検出される腸管病原体であり、一腹産子のうち数頭が下痢を呈するような常在的な発生が多いのが特徴的です。しかし、近年国内外の大規模農場において、複数の母豚産子で一腹全頭が発症する農場内での流行が報告されており、従来考えられていたよりもロタウイルス感染症の被害は大きいものと推察されます。

一言に「ロタ」としてまとめられることが多いですが、ロタウイルスには交差防御免疫の成立しない複数の血清群が存在します。現在では遺伝子解析による分類が主流となり、哺乳類と鳥類でA群からH群のロタウイルスが確認されています。そのうち、豚ではA群～C群、E群、そしてH群が検出されていますが、主にA群～C群が国内外の豚で下痢と関連して検出されています。国内では哺乳豚で検出されるロタウイルスの6～7割はA群であり、離乳豚では複数群が同時に検出される例が約半数を占めます。

さらに、各群のロタウイルスはウイルスの最外殻を構成するVP7とVP4の抗原性に基づいてG血清型とP血清型に分類されます。VP7とV4のそれぞれが独立してウイルスの感染防御に重要な役割を果たすことから、GおよびP血清型の組み合わせは感染防御を考察する上で非常に重要となります。現在までに国内外の豚においてA、BそしてC群ロタウイルスそれぞれで多様なG型とP型が確認されています。このロタウイルスの血清学的多様性は、対策を困難にするとともに、ワクチン開発の障壁ともなっています。

異なる血清群間での交差防御反応は成立しないため、A群ロタウイルスに感染してもB群ロタウイルスやその他の血清群のロタウイルスに感染します。また、同じ血清群でも血清型の組み合わせが異なる株の再感染では下痢症状の軽減が認められるものの感染は防御できません。しかし、複数回曝露すると徐々に他の血清型に対する交差免疫を獲得するとの報告があります。な

お、A群ロタウイルスの下痢が農場で流行したときには、今までとは異なる血清型の組み合わせを持つ株が検出される傾向があります。

ロタウイルスの主な伝播経路はPEDウイルスと同様、糞便やそれに汚染された媒介物を介した経口感染で、罹患するのは主に哺乳豚から離乳豚です。下痢の発生状況や症状はウイルス側要因（交差免疫を有しないウイルス株の存在、ウイルス株の病原性と曝露量）、免疫（母豚からの初乳や乳汁を介した受動免疫の程度）、宿主要因（子豚の日齢や栄養状態）、環境要因（温度やエサなどの飼育管理方法）、そして他の病原体による二次感染の有無など様々な要因の影響をうけます。冒頭で紹介した近年の農場内流行事例は、分娩舎をオールインオールアウトで管理する農場で発生する傾向があります。これは、オールインオールアウト管理による病原体の感染環遮断のために、母豚群のロタウイルス曝露機会減少で母豚群の免疫が低下したことに加え、哺乳豚が免疫を上回る量のウイルスに曝露されるか、交差免疫の効かない株（異なる血清群、または異なる血清型の組み合わせを持つロタウイルス）に曝露されたために下痢を発症し流行にいたると推察されます。国内ではワクチンは市販されていないため、発生低減にはPEDと同様ウイルスの侵入・蔓延防止対策と環境中ウイルス量低減などの飼養衛生管理が不可欠です。

最後に

ここまでウイルス性下痢症について4回にわたりご紹介してきました。ウイルス性下痢症への対策はウイルスの侵入・まん延防止対策と環境中ウイルス量の低減が基礎となります。

これらの対策はウイルス性下痢のみならず、養豚で問題となる様々な病原体の発生防止にも有効であると考えられます。ウイルス性下痢症対策を通じて農場全体の疾病が減少することを期待して稿を終えたいと思います。

ネズミによる被害を防ぐ

岐阜大学応用生物科学部特任助教 森部 絢嗣

畜舎における獣害の中でも最も厄介な動物はネズミです。わずかな隙間からも侵入し、畜舎内に存在する餌を食べます。餌だけならまだ被害額は少なく済みますが、感染症の伝搬や電気配線を齧ることによる火災は大きなリスクとなります。ネズミ対策も他の獣種と同様、誘因物の除去と侵入防止、環境改善が必須です。すでに侵入されてしまった場合には駆除することになります。対策として以下の5項目を挙げました。

①糞やトレイルカメラで出没状況を確認

まずはネズミの出没状況を把握することが大切です。人に慣れたネズミであれば、作業中でも出没を確認できますが、侵入してから間もない初期段階は個体数が少ないことからネズミの生息に気づきません。定期的に梁や畜舎の角などに糞が落ちていないか確認します。ネズミが低密度である場合、糞がなかなか確認できないこともあるので、出没しそうな場所にトレイルカメラを設置して、定期的なモニタリングを行います(日本SPF豚協会だより2015.07第60号参照)。画像による実態の把握は、従業員の管理意識を高める上でも有用です(図1)。



図1. 畜舎に出没するクマネズミ

②餌となるモノを除去

豚の給餌器周辺については限界がありますが、餌タンクやパイプからの餌の漏出を防ぎ、糞尿排路等をこまめに清掃します。

③侵入経路や棲み家となる隙間を塞ぐ

数センチのわずかな隙間があれば、ネズミは侵入します。大動物畜舎においてそれらを完全に塞ぐことは



図2. ネズミの移動経路を金網で塞ぐ一例

困難です。しかし何も対策をしなければ、ネズミを排除することはできません。そこでネズミが利用する移動経路や隙間を安価な金網等で塞ぐことによって、ネズミの行動範囲域を縮小させます(図2)。これによって、捕獲罠や殺鼠剤を設置する場所が少なくて済み、防除管理にかかる費用や労力を削減できます。

④殺鼠剤を適切に設置

①や③によって、ネズミの行動を制御した上で効果的な場所へ殺鼠剤を定期的に設置します。通常管理であれば、2週間～1ヶ月に1度ほどの間隔で、集中的に個体数を減らす場合は、最低でも週に1回の間隔で行います。畜舎の清掃や豚の育成・出荷状況によってもネズミの出没状況が変化するため、カメラ等を用いてネズミの出没時期や場所を特定すると効率よく効果的に駆除が可能です。

⑤捕獲

③によってネズミの移動経路を制限した上で粘着シートなどの罠を設置すると効率よく捕獲が可能です。しかし警戒心の強い成獣個体はシートを避けるため、捕獲が困難です。そのため、かご罠等に慣らしてから捕獲する方法があります。わなを設置した段階で、罠の扉が閉まらないように固定しておき、餌を罠内と周辺に撒いておきます。しばらくそのままの状態にしておき、餌だけ補充します。対象となる個体が罠内へ入るようになってから、罠の仕掛けをセットします。トレイルカメラを用いると的確に仕掛けるタイミングを知ることができます。

紹介●SPFのお店26

Humbrug Will(ハンバーグ ウィル)

東京都新宿区新宿1-3-8 YKB新宿御苑ビル TEL.03-3358-4161
URL www.hajimenoippo.co.jp

今回ご紹介するのは東京・新宿にあるハンバーグ専門店。都心のオアシスとして名高い広大な庭園公園・新宿御苑の脇道にある小さなお店です。金井秀樹社長はにんにく料理専門店など4店舗を経営するかたわら経営コンサルタントでもあります。

ハンバーグの原料は岩手県のSPF豚認定農場・(有)ケイアイファウムの「岩中ポーク」100%。なぜ豚肉100%のハンバーグを? 「女性が一人でも気軽に入れるハンバーグ店をやりたいとずっと思っていて、東京中のお店を食べ歩きました。辿り着いたのが、もたれにくい豚肉のみのハンバーグ、そしてたまたま知り合いのお店で出会った岩中ポークだったんです」と金井さん。「本当に群を抜くおいしさでした」。試行錯誤を繰り返し、4つの部位を使用、挽き方もそれぞれ変えて混ぜ合わせるこだわりで、肉本来のおいさを際立たせるハンバーグを完成させました。

2007年のオープン当初はやや苦労したものの口コミでおいしさが評判に。「メディアにも助けられましたが、豚肉の力も大きいですね。脂身がおいしい。女性客が増えました」。うかがった日も平日のランチ営業終了間際にもかかわらず満席で外には行列が。スタッフの対応もとても丁寧で、居心地満点でした。休憩中にはテレビの取材も。今月には東京都墨田区に2号店もオープン予定です(「Mrs.Burg」錦糸町駅から徒歩2分)。

岩中ポークに惚れ込んでいるという金井社長、ケイアイファウム北上農場にも足を運び、今年の夏にはスタッフも社員旅行で北上農場を訪れたそうです。「本当に満足しています。このお肉のおい



金井社長(前列左端)、土屋店長(中央)とスタッフの皆さん



ソースは3種類、こちらはデミグラスソース
しさを、もっともっと広めたい。ゆくゆくは「のれん分け」の形でスタッフの地元での独立をバックアップし、全国展開を、というのが夢です。

わざわざ足を運ぶ価値のある、そしてまたすぐ行きたくなる、そんなすてきなお店でした。読者の皆さんもぜひ一度、行列覚悟でいかがでしょう。

●協会からのお知らせ●

●理事会を開催

平成27年度の理事会を3月25日(金)、協会事務所に開催し、6月の総会に諮る議事等について協議いたしました。

●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会(社員総会)は6月15日(水)開催の予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送

りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

●代議員・理事の交代

組織内人事異動により、ホクレンピラミッド選出の代議員および理事が、清澤博明氏から篠原禎忠氏に交代いたしました。また、東北地区選出代議員で理事の石川輝芳氏(宮城県・s農事組合法人しわひめスワイン)が事情により退任されました。

SPFポークの肉じゃが

●レシピ提供・「じゅん粋」若旦那 野沢 泰基（東京都武蔵野市吉祥寺）

今回は定番の肉じゃがのイメージを覆す、厚切りバラ肉と新じゃがを使ったメニュー、ごはんのおかずにもお酒のおつまみにも合いそうです。じゃがいもは素揚げで火を通し、煮込み過ぎないのがポイントのようです。

●材料●（作りやすい分量）

SPF豚バラブロック肉 1kg

新じゃが 600g

揚げ油 適量

<タレ>

水 540ml

酒 540ml

砂糖 270g

しょうゆ 270ml

みりん 180ml

●つくり方●

- ① バラ肉は4cm角にカットします。
- ② タレの材料を鍋に入れ中火で30分煮ます。
- ③ 新じゃがは水洗いし、皮のまま油で素揚げにします（串を刺して火の通りを見ます）。
- ④ ③火が通ったら油から上げて②に入れ3～5分絡めます。
- ⑤ ①を入れてさらに絡めます。肉に火を入れ過ぎないように、余熱でレア目に仕上げます。
- ⑥ お皿に盛り付け、お好みで青味を添えます。

【野沢シェフからのアドバイス】

タレに新じゃがや肉を入れたら、手早く絡めましょう。時間をかけると味が濃くなってしまいます。



●協会からのお知らせ●

●認定規則の改正

SPF豚農場認定制度が開始されてから20年の節目となった平成26年度から認定制度の見直しが継続事業として進められている中、認定規則の改正案も検討い

たしております。

今年度中の改訂を視野に、ワーキンググループ会議等において検討を重ね、今年度の総会に諮ることとしております。

●認定情報●

●平成28年3月認定農場

(認定期間：平成28年3月10日から29年3月31日まで)

北海道・全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育種研究室、秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、(株)シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、(株)シムコ岩出山事業所、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、千葉県・(株)スターピッグファーム、鈴木治彦養豚、飯田養豚、(株)シムコ館山事業所、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)籾木ピッグファーム、平野英夫SPF豚農場、

長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム(有)、愛媛県・JAえひめアイパックス(株)多田ファーム天貢農場、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、(有)七城SPFファーム、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、宮崎県・(株)ナンチクファーム守山細田農場、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、同阿久根農場 (以上30農場)

※次回認定委員会は平成28年6月9日の予定



(有)ケイアイファウム

渡辺 和宏さん

●岩手県北上市・盛岡市

背中を見せて農場を引っ張る 職人氣質のリーダー

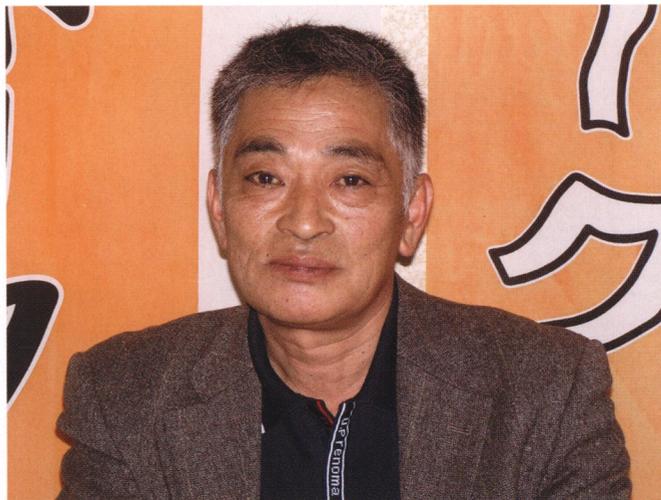
(有)ケイアイファウムといえば、協会の認定事業開始当初から認定を更新している老舗SPF豚農場です。銘柄豚「岩中ポーク」もその品質とおいしさで高い評価を得ています(6ページ「SPFのお店」参照)。

同社の専務取締役として北上農場(北上市)と玉山農場(盛岡市)合わせ母豚1,200頭規模の経営を担う渡辺さん。実は豚とは縁もゆかりもなかったそうです。

北上の米農家の長男ながら「大工になりたい」と高校は建築学科。卒業後建設会社に勤務したものの数年で退職、地元に戻ったところを知り合いだったケイアイファウムの3代目社長に「アルバイトに来ないか」と頼まれ農場へ。「続ける気はまったくなくて、いつ辞めようかと思っていた」渡辺さんでしたが、そのうちに「豚が面白くなってきて」はや35年以上です。腕を生かして農場整備も自分たちでこなしたそうです。「実際に豚を飼ってみて使いやすいように工夫することが楽しいし、その努力の結果が成績として表れる、そこがよかった」。玉山農場の事務所は自ら設計したそうです。

SPF豚農場として防疫面での配慮もあり、かなり大掛かりな工事もこなす渡辺さんですが、一昨年、作業中に鉄板の下敷きになり右足首を複雑骨折、2か月間の入院を余儀なくされました。「自分がケガをして、従業員に無理をさせてはいけない、と思いましたね」。

渡辺さんは「豚は生き物、決まったマニュアルでは



飼えない。古い考え方もかもしれないが、豚にさわらないとわからないこともある。経験しかない。デスクワークだけでは無理だと思います」と今も農場に入り、2農場合わせて24人の従業員の先頭に立っています。従業員の平均年齢は30歳代、勤続年数が高いのも自慢です。「おかげさまで後継者も育っている。彼らのために前向きに、壁は大きいけれど乗り切っていきたいですね」。

そんな渡辺さんに奥様との出会いをお聞きすると「今でいう合コンです(笑)」。北上から盛岡まで通い詰めて美容師の奥様を射止めました。1男1女に恵まれ、2歳になるお孫さんも。バレーボール・器械体操選手だったというスポーツマンの渡辺さんですが、今のご趣味はたまにパチンコに行くぐらいとか。どうやら仕事に興味になっている様子。お酒もあまり飲まれません。どうしてもやめられない(やめる気がない)のがたばこ。これから先いくら値上げされてもやめないそうですが、お孫さんにやめてと頼まれたら? 「うーん、それは…、わからないなあ(笑)」。

多くを語らず、自らの背中を見せてみんなを引っ張る、そんな職人リーダーとお見受けしました。(編集部)

編集後記 昨年度は追い風(円高へ資源安、相場高)の年でした。今年度も飼料大幅値下げの幕開けですが、自助努力の成果を見える形にしたいものです。そのためにもバイオセキュリティの見直しが大切です。疾病被害を最小限に抑え、生産性向上につなげましょう。思いがけないところに落とし穴があります。第三者の意見も大切です。CM農場の昨年度の生産成績は前年度とほとんど同じですが、A薬品費が平均で10%強増加しています。自農場の要因を客観的に見つめ直し、対策を講じましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第63号 2016年4月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀